

無

題

本作は、m i x i コミュニティ『sugar spot meetingroom.』にて
リレー小説として発表されたものである。

赤と、青と、白と、黒と、

日々流れ行く時間の中で、際限なく広がる野望の前に立ち塞がる壁を、あとどれだけ越えれば、この頭の中を支配する「何か」を排除できるのだろうか。

「何か」|| 「欲」 「不安」 「苛立ち」 「e t c :」

最も重要な形が、今の自分にとって何なのか分からず、交差点の真ん中で立ち止まっていた。？「危ないよ。」

誰かの声がある。歩みを止めようとしなない人の流れを、ただただ傍観していた。

？「早く渡って。」

また誰かの声がある。信号の点滅と共に、腕を引っ張られる。

誰なんだ。

私はただ、見ていたいただけなのに。

止めどなく溢れ出てくる人、言葉、音、モノ達がさまざまな色となって私の中に入って来るのを。

私はただ、待っているだけなのに。

気違いのように巡り行く情熱、悲哀、歓喜、感情がさまざまな色に変わって、私の中から発信出来る日が来るのを。

私が今こうして立ち止まっているのだから、大切な私の「時間」なのに。

交差点を渡り切ると、一仕事を終えたようにゆっくりとした足取りで歩き出す。

私はただ、無言で後をついて歩く。

行く宛ても分からずに、ただ流れに乗って。

一体、誰なのか疑問も持たずに。

緻密に計算されたかのような歩幅に、あまりにもしつかりとした足取りに、何の不安も感じることなく。

2007年2月19日 13時40分

2007年2月19日 13時40分 勇往邁進 その頃、中国地方では一人の男あり。この男、まさに野人。本能のおもむくままに野人。結末を言うと、この話しはこの男によって世界はさらなる平和を手に入れることとなる。しかしこの男まさに野人。女は手にとるバラとばかりに抱いていく。この男名を畑山 高貴（31）揉め事がいつも回りと絶えないまさに野蛮な男だった。そしてこの男こそが話の冒頭で出てきた少女 神楽坂 郁（17）を殺す超本人である。それなげか。それはこの神楽坂 郁こそが後に悪の根元となる人間だからである。最初に話しておくが、この話は最終的にどうなったかではなくて、なぜ彼女がそうなったのか、そしてなぜ彼が世界を救えたか、救おうと思ったかである。

そして舞台はこの話のキーマン 若田部 光平（51）のいる東北地方へと続いていく。

私は今まで道を外れた事がない。

厳しい家庭に育ったわけでもなくただ平凡に生きてきただけだ。特にやりたいこともなくただ目の前にあることをこなしてきた。

大学を出て就職し家庭を持ちただひたすら働いた。

自分の人生がつまらないとも思わないしこれが自分なんだと。

そんなある日。

中学生のグループが私に詰め寄ってきた。

「おっさん！金貸してよ！」

私はすぐにお金を出した。面倒な事はごめんだと。

するとグループの一人が面白くないと言い、いきなり殴ってきた。一人がやりだすと他の奴らもこぞとばかりに殴りつけてきた。

殴られ、蹴られ、意識が朦朧としていく中、なにか聞こえてきた。

「悪い奴らは僕がやっつけてやる!!」

子供の頃の私の口癖だった。

気がつくと私は病院のベットにいた。

私は今まで道を外れた事がない。
厳しい家庭に育ったわけでもなくただ平凡に生きてきただけだ。
特にやりたいこともなくただ目の前にあることをこなしてきた。
大学を出て就職し家庭を持ちただひたすら働いた。
自分の人生がつまらないとも思わないしこれが自分なんだと。

そんなある日。

中学生のグループが私に詰め寄ってきた。

「おっさん！ カルデラ貸してよ！」

私はすぐにカルデラを出した。面倒な事はごめんだと。
するとグループの一人が面白くないと言ひ、いきなり殴ってきた。
一人がやりだすと他の奴らもこぞとばかりに殴りつけてきた。
殴られ、蹴られ、意識が朦朧としていく中、なにか聞こえてきた

「悪い奴らは僕がやっつけてやる！」

子供の頃の私の口癖だった。

気がつくと私は病院のベットにいた。

(ワカタベ…コウヘイ…？ 珍しい名)

私は今まで道を外れた事がない。

厳しい家庭に育ったわけでもなくただ平凡に生きてきただけだ。
特にやり太鼓ともなくただ目の前にあることをこ梨てきた。
大学を出て就職し家庭を持ちただひたすら働いた。
自分の人生がつまらないとも思わないしこれが自分なんだと。

そんなある「危ないよ。」日。

中学生のグループが私に詰め寄ってきた。

「おっさん！ なまはげ貸してよ！」

私はすぐに焼いた生ハゲを30個出した。面倒な事はごめんだと。
するとグループの一人が面白くないと言ひ、いきなり殴ってきた。
一人がやりだすと他の奴らもこぞとばかりに殴りつけてきた。

殴られ、蹴られ、意識が朦朧としていく中、なにか聞こえてきた

「悪い奴らは僕がやっつけてやる!!」

子供の頃の私の口癖だった。

気がつくと私は病院のベットにいた。

(前だね…名前っていうか、ミョージか？ まあ、どっちでもい)

そんなある日。

中学生のグループが私に詰め寄ってきた。

「おっさん！ インテリジェント・コスモス構想貸してよ！」

私はすぐにインテリジェント・コスモス構想を出した。面倒な事はごめんだと。

するとグループの一人が面白くないと言い、いきなり殴ってきた

一人がやりだすと他の奴らもここぞとばかりに殴りつけてきた。

殴られ、蹴られ、意識が朦朧としていく中、なにか聞こえてきた

「悪い奴らは僕がやっつけてやる!!」

子供の頃の私の口癖だった。

気がつくと私は「早く渡って。」病院のベットにいた。

(いけど…でもあなたね、ああいうこ)

綿師は今まで未知を外れた琴がない。

厳しい過程に育つ戯けでもなくただ平凡に生きて北だけだ。

特に槍、太鼓とも鳴くただ目の前にRことを粉師してきた。

DA医学を出て就職し家庭を持ち多田ひたすら波田雷太。

自分の人生が妻らnightも思わ無い師これが自分なんだと。

そんなある日。

なまはげのグループが私に詰め寄ってきた。

「先生！ カルデラ貸してよ！」

私はすぐに焼いたカルデラ6ダースを12人前出した。面倒な事はごめんだと。

するとグループの一人が面白くないと言い、いきなり殴ってきた。一人がやりだすと他の奴らもここぞとばかりに殴りつけてきた。殴られ、蹴られ、意識が朦朧としていく中、なにか聞こえてきた

「悪い奴らは僕がやっつけてやる!!」

子供の頃の私の口癖だった。

気がつくと私は病院のベットにいた。

(とはマズインじゃないかな、流石に：なにせ相手は14歳の子)

私は今まで道を外れた事がない。

厳しい家庭に育ったわけでもなくただ平凡に生きてきただけだ。特にやりたいこともなくただ目の前にあることをこなしてきた。

インテリジェント・コスモス大学を出て就職し家庭を持ちただひたすら働いた。自分の人生がつまらないとも思わないしこれが自分なんだと。

そんなある日。

コスモスのグループがおっさんに詰め寄ってきた。

「おっさん！ コスモス貸してよ！」

おっさんはすぐに金正日を8人出した。面倒な事はごめんだと。

するとドクター・コスモスの一人が面白くないと言い、いきなり殴ってきた

一人がやりだすと他のおっさんもここぞとばかりに殴りつけてきた。

殴られ、蹴られ、意識が朦朧としていく中、なにか聞こえてきた

「悪い奴らは僕がやっつけてやる!!!」

子供の頃のおっさんの口癖だった。

気がつくとおっさんは病院のベットにいた。

供だよ...？

51歳のいいおっさんが、寄って集って、

たった1人の子供を袋だたきにしちゃあmazuidearou…

…51歳の

いい、なまはげが、寄って集って、

たった1人の子供様を袋だたきにしちゃあmazuidebe.

…51歳の

いいミスターが、寄って集って、たった1人のコスモスたちを袋だたきにしちゃあmazuidearu.
べ。

今まで道を外れた事がない。厳しい家庭に育ったわけでもない。ただ平凡に生きてきただけ。「危ないよ。」特にやりたいこともなくただ目の前にあることをこなしてきただけ。大学を出て「早く渡って。」就職し家庭を持ちただひたすら働いただけの51歳のいいおっさんが、寄って集って、たった1人の子供を袋だたきにしちゃあ…「危ないよ。インテリジェント・コスモス構想。」私は若田部光平です。なので、危なくはないでしょう」「早く渡って。インテリジェント・コスモス構想。」私は若田部光平です。なので、そんなに急がなくても、大丈夫でしょう」「早く渡って。」私はキーマン。Kohei Wakatabeです。なので、そんなに急がなくても、大丈夫でしょう」「そんなに急いでも仕方がないでしょう」「そんなに急いだからといって渡れるとも限らないでしょう」「そんなに急いだからといって、急げるとは限らないでしょう」「そんなに急いだからといって、先生が先に居る場合もあるでしょう」「そんなに急いだからといって、先生が先に居る場合もあるでしょう」「居ない場合もあるでしょう」「ミスターが居ない場合もあるでしょう」「先生がいないで、ミスターがいる場合は、もちろん無いでしょう」「そんなに急いだから」といって、世界は急がないでしょう」「そんなに急いだからといって、世界は、世界的な世界は急がないでしょう」「世界的な世界は、そんなに急いだからといって、急がないでしょう」「世界的な世界は、こつちがそんなに急いだからといって、急ぐというようなことはしないでしょ」「そんなに急いだが、かえって渡れないでしょう」

以上が、子供の頃の私の口癖である。

(気持ち悪いおっさん、何かずつと訳の分からないこと言ってるよ)
て会うのよ)

「はい、若田部さん点滴取り替えますねえ」

(生理的に拒否反応だわ)

佐喜子はいつもより過剰にアルコールスプレーを手に擦り込んだ。白いストッキングを履いたナースシューズの先から覗いた爪先には桜色のペディキュアが綺麗に塗られている。

「今岡さん」

「はい」

「今夜勤よね?」

「はい」

「急で申し訳ないんだけど明後日と交換してもらえないかしら? 旦那が出張になって娘をみなくちゃならなくなったのよ、いい?」

「はい」

「ありがとう。悪いわね、じゃあその仕事終わったらあがっていいから」

「はい」

実年齢より少し若く見える婦長の後ろ姿を目で追うとうなじのあたりに2本、縮れた白髪があるのに気づいた。

「あはは」

何となく笑えた。

「若田部さん、あつちの病棟に移されるらしいわよ」

「やっぱりね。決まったなら早くしてほしいよね」

「お先に失礼します」

「あ、今岡さん、お疲れさま」

「お疲れ様です」

(あはは)

何となく笑えた。

今日はコタローと一緒に暮らし始めてちょうど3年目の記念日だったので夜勤が交代になったのは逆に好都合だった。

記念日をその当日に祝うということは多くの人々が考えるよりも意外に重要なことでつまり正月を1月2日に祝ったらその後の暦が一つずつバラバラになって仕舞には、今日が何の日か何年何月何曜何時何分だか収集がつかなくなって世界中がカオスに飲み込まれてしまうであろう。おそらく。

スーパーで、一番高い牛肉より少しだけ安いほうの牛肉を手を取った。

あまりに霜降りすぎてもコタローの体のためにはならない。

その他には自分の為にいつもより少し高い赤ワインを買った。

小さな可愛いチーズケーキも買った。

佐喜子は大通りに面した品の良い色をしたマンションに住んでいる。

いつものようにオートロックのインターホンを押したが

いつものように誰も出ない。

いつものように自分で鍵を差し込むいつものように自動ドアは開いた。

「ただいま」

玄関に入ると同時に荒々しい息遣いが聞こえた。まちに拘束され扉に押さえつけられた。いつものことだ。

「コタロー！」

長い舌が、首筋や耳や体中を執拗に嘗め回す。

足の指の間にその舌が伸びた時、全身の肌があわ立った。

爪に歯が当たり、桜色のペディキュアが少し剥れた。

透き通った目

逞しい腕、脚、胴体

そして、堂々とした尻尾。

コタローは3歳になったばかりの立派な紀州犬である。

佐喜子はその全てに惚れこんでいる。

欲情している。

「あはは」

面白くも無いのに笑った。

買ってきた肉をコタローに与え、自分はワインを飲んだ。

「あはは」

笑えば笑うほど涙が出てきた。

「あははは」

部屋にある全てのドッグフードを床に敷き詰め、ありったけの鍋やポウルに水をたっぷり入れてならべた。

玄関を開け、扉に靴をはさんでロックがかからないようにした。

「あは…」

ベランダの窓を開け柵に脚をかけた。

コタローはドッグフードを食っている。

行ける。

佐喜子はベランダから消えた。

…どさり。

帰宅途中の人々が見て見ぬ振りを見ながら通り過ぎて行く。
残念ながら佐喜子の部屋は2階であった。

「あはは」

(早く渡って、悪いやつらから君を守ってあげる)

声は聞こえているはずなのに、聞こえない振りをした。

植え込みの中から無様な格好で星の见えない空を見上げた。

相変わらず通りを行く人は見て見ぬ振り。

その中にある、ひとつの強い視線には、まだ本当に気付いていなかった。

神楽坂 郁（17）の場合

私はただ、それを見ていただけなのに。

私はただ、鉄也を待っていただけなのに。

私はただ、無言で後をついて歩く。

一体、誰なのか疑問を持たず。

緻密に計算されたかのような歩幅に、あまりにもしつかりとした足取りに、何の不安も感じることなく。

無様な格好で植え込みに嵌っている人を横目に、無言で後をついて歩く。

ただただ、歩く。

ネオンの中を歩く。ブティックホテルを歩く。階段を歩く。浴室を歩く。ベッドの上を歩く。福沢の上を歩く。諭吉の上を歩く。枕の上を歩く。メキシカンピラフの上を歩く。フロントの前を歩く。駅のホームを歩く。車内を歩く。改札を歩く。

私はただ、無言で後をついて歩く。あまりにもしつかりとした足取りに、何の不安も感じることもなく。

青空の下に倒れている黒人を横目に、無言で後をついて歩く。

私はただ、土手を歩いている。

私はただ、鉄の門を抜けて歩いている。

私はただ、チャイムの音を聞いている。

私はただ、教室に流れついている。

そして、教壇の前に立っている。

「早く座らんかい、このバカチンが！」

鉄也の声を聞いた事がとても嬉しかった。

畑山 高貴（31）の場合

「悪い奴らは僕がやっつけてやる!!」

もう一度その言葉を聞かせてくれ。若田部。何に気付いていなかったというのか、私は。このガーナで。

私の横にはカカオの実がたくさんなっているんだよ。そしてそれを黒人が無心にむしり取って

いるんだよ。そして真っ白い歯で笑いかけるんだ。非常に憎たらしい笑みを浮かべて。彼や彼女らには悪いが私にはそう見えるんだ。腹が立つんだよ。そして右の拳が赤く鮮血しているんだ。雲一つない青空の下に罪の無い人間が倒れている。

私は極悪人だ。本物の悪だ。私をやっつけてくれ。私をお前の手で、逝かせてくれ。

もう野人には、戻れん。自由と正義とはなんだ。

2羽の鳥が羽ばたいた。

岸 ユウスケ（25）の場合

「岸くん、起きて。もう朝よ。あなたの番よ」

そう、僕の番みたいだ。東大に勤めるお姉さんが優しく声をかけてきた。お姉さんといっても血がつながっているわけではない。僕が勝手にお姉さんと呼んでいるだけで、実は弟だ。

武者震い。わくわくする。この流れで僕に順番が回って来たことが最高の喜びだ。そして最高の壁だ。そして最高の愛だ。そしてそれを受け止めよう。受け止めると同時に投げ返そう。豪速球で、目の前にそそり立つ立派な壁にぶち込んでやる。そして貫いてしまえ。貫いた事すら、壁側が気付かない勢いで飛んで行け。行け。行け。GO！ GO！ GO！興奮。高揚。衝動が抑えられない。動き出す。勝手にアレが動く。狂いそうだ。暴れだしそうだ。欲望だ。気持ち悪いだろうな。相当気持ちの悪い野郎だ。でもいい。それでこそだ。

僕はしょうがなく飼育小屋の中から出て来た。鳥の糞が右の肩についていた。白く固まり羽毛が挟まっていた。

「さあ岸。頑張るぞ。」

後藤だ。この男はなにかにつけて僕を励ます。そして、53mきっかしの物干竿を右手に持って隣の民家を破壊し続ける。その物干竿の先端にはジャマイカの国旗がはためいている。

僕は昔、何でジャマイカなんですか。と聞いた事がある。その瞬間、後藤の顔は赤面し、今まで着ていた青服が黒服なっていたのを憶えている。

「さあ岸。頑張るぞ。」

さつきよりもゆつくりとした口調の後藤の励ましを聞きながらあそこへ向かい出した。

あそこへ向かうにはちよつとした密林地帯を通らなければならない。密林地帯というのはジャングルの事だ。よく分からない熱帯の生物が生息している木々に覆われた場所だ。

僕はそこがとても嫌いだ。なぜ僕はそこが嫌いなのだろうか。後藤に聞いてみる事にしよう。「なあ岸。俺にそんな事を聞いたってわかるわけないだろう。」

そりゃそうだ。全く無意味な事を聞いてしまったみたいだ。しかし本当に無意味な会話などがあるのだろうか。その会話が無意味だった事に、気付く意味はないのか。

遠くの電柱の影から全身をタイツに覆われた男女がこっちに駆け寄ってくる。

そして僕らの横を通り過ぎた。その時にジャングルについた。

―ジャングルの入り口には―ジャングルグルグル・ぼわくんふわくんという生物が生息している。見た目は擬人化された馬と、兎と蛸と、元素記号が混ざり合ったような出で立ちをしている。

―ジャングルグルグル・ぼわくんふわくん―は大きな亀の上に乗っかり、移動している。コバンザメのように。気持ちの悪い生き物だ。

後藤の足が止まった。

―ジャングルに足を踏み入れる事なかれ―

と書かれた看板と。

―ジャングルに足を踏み入れてみよう―

と書かれた看板があった。

いや両方とも風雨によってジャングルが、シャンクルになっている。イメージで読んでしまった事を悔やむ。

後藤に謝りながら、これはどうゆうことなのか聞いてみた。

「なあ岸。どっちを先に発見するかで大きく意味合いが違ってくるもんなんだ」と後藤は悲しそうに語っていた。僕もなんだか悲しくなった。後藤の表情が悲哀に満ちていたから。

後藤は右手に持っている53mの物干竿を振り回し看板をなぎ倒した。と同時にジャングルの全ての動植物をなぎ倒していた。

はじめて僕は後藤に感謝の念を抱いた。そして僕らはまたあそこへ向かい出した。

あそこに行くにはまだ通過しなければいけない場所が3カ所存在した。1つは今岡病院の前にある、マンホールの内部。つまり下水の中。もう一つは何かの展示会場。その展示会場は毎回場所が変わってしまうからややこしい。3つ目に和風豚骨醤油でお馴染みの、たしか「まつしま」というラーメン屋だ。兎に角、後藤について歩き出した。

もしもここにマイクタイソンがいたら、一発でKOされるだろう。間違いない。それは紛れもない事実。あつて然るべき事実。

しかし奴の片耳は、僕の口の中にあるのだ。

今岡病院にはちよつとした思い出がある。

1年前の事だ。交通事故にあつた僕は救急車で今岡病院まで運ばれたんだ。意識はしっかりしていた。僕を轢いてしまった後藤が慌てているのをなだめていたのだから。内蔵が完全に飛び出しながら。

病院に搬送され手術室に運び込まれた私を見て、医者がかう言つてたんだ。

「なんで意識あんのか？ コイツ。っていうか、死んでんだろ。普通。だつて全部出てんじゃん。

これ。ほら。これとか。すごいグチャグチャじゃん。」

「先生辞めて下さい。患者さんはまだ意識がハッキリあるんです。聞こえますよ。そんなところを、

摘んだり、引っ張ったりしないでください」

「いいじゃん。どうせ死ぬよ、こいつ。俺の腕じゃ無理だもん。こんなになつてたら。無理だから俺帰るわ。後よろしくね。シクヨロ」

本当にその医者は帰ってしまった。手術室に残されたのは数名の看護婦と精密機械と医療器具と僕。数名の看護婦は一生懸命に治療を施した。他の医者と呼ばなかった。それほど一刻を争う状況だったのだろう。そして意識のある僕は自分も手術に参加した。帰った医者に対する怒りは殺意へと変化していたが、殺す事も生きていなければ出来ない。僕は全身全霊をかけて手術に臨んだ。

外ではそろそろ手術中の赤いランプが消えた頃ではないだろうか。手術は成功した。しかし、やはり素人の手術。いくら看護婦数名がついていたとしても、医療ミスが起こっていた。縫合した下腹部のあたりから腸のような臓器が25cmほど飛び出し垂れ下がっていた。まあそんなことはどうでもいい。生きられたのだから。お釣りのようなものだ。ある意味ではあの医者の行動が無ければ僕は生きていなかったのかもしれない。生きたいという強い気持ちを持てたのだから。しかし、例えばそれが意図的であったとしても僕はそんなにお人好しではない。無意図だということとは分かりきっている事だし。何の躊躇も無く宿直明けの帰り道を狙い、後ろから腸のような臓器を使い医者を絞殺した。

遠くの自販機の影から全身をタイツに覆われた男女がこっちに駆け寄ってくる。

そして僕らの横を通り過ぎた。一瞬右手が無いのが見えた。その時に今岡病院前のマンホールについた。

マンホールの上に東大に勤めるお姉さんがいた。見知らぬ小柄な男も居た。肩車をしていた。

「今日はここを通らなくても大丈夫よ」

東大に勤めるお姉さんは微妙な表情をしながら優しく話しかけてきた。僕は理由を聞いた。

「ドクター・コスモスさんが話をつけてくれたのよ」

バランスを保ちながら、下にいる小柄な男の方を見ている。

「そんなに急いだからといって、世界は急がないでしょう」

小柄の男がぼそぼそと言った。ドクター・コスモスというのか、この男は。でも何を言ってるんだらう。

「世界的な世界は、そんなに急いだからといって、急がないでしょう」

小柄な男は少し大きめな声で言った。東大の姉さんが少しバランスを崩しかけた。

「世界的な世界は、こっちがそんなに急いだからといって、急ぐというようなことはしないでしよう」

うるさいくらいの声で言った。東大の姉さんはドクター・コスモスの肩から落ちた。とても無様に見えた、でもそこが何ともかわいらしい感じだった。

「ていうことは、展示会場の方に向かっていいんだな。だよなあドクター。」

「…」

後藤の質問にドクター・コスモスは何も答えようとはしなかった。ドクター・コスモスは後藤に怯えているのか。小刻みに震えている。「危ない」

そう叫んで、東大のお姉さんはドクターコスモスに抱きついた。マンホールの上で。すると、コスモスは聞き取れないような、しわしわの喉から出る声で呟いた。

「インテリジェント・コスモス構想」

轟音が聞こえる。何の音だろう。空だ。今まで空を飛び回っていた、鳥とペンギンと白熊とパ نداと人間がドクター・コスモス目掛け落下している。聞いた事の無い音が空間を包む。

「ズゴォオオオオバツバツデーゾーグロロリリダヤーベルソオチャーデヤチャーゴゴゴヒューウヒューピーユーユーヒューシュージャーギャージュールグワアアアオオオオズドドドドドドドドドドドドドドドオ」

その奇怪な音と混じってドクター・コスモスの声が聞こえた。

「4人で」

その言葉を聞き瞬時に意味が分からなかった、がなんとなく後ろを振り返ってみた。全身タイトの右手の無い男女がいた。微笑んでいる。

もう一度前に視線を持っていってみると、そこにはドクター・コスモスと東大の姉さんの姿は無かった。そこには無数の肉の固まりが折り重なっていた。

感動が止まらない。悔しさも止まらない。滲み出す。溢れ出し。こぼれ。水たまりになり。小川となって。池。川。湖。河。海へと。そして漂い、蒸発し、凝固し、雲になり、雨を降らせ、河に戻り、とんがり帽子の取水塔を通り、水道を抜け、コップの中へ。

そしてその感動は、僕の口の中にあるのだ。

展示会場はわりと近くにあった。歩いて30秒。要するにここ自体が会場の一部だったみたいだ。

タイトの男女も後ろからついて来ている。

会場の入り口の前までやってきた。リングの形をしているドアを開けた。次に時計の形をしたドアも開けた。さらにマヨネーズの出口のような形をしている道を通って、電車の形をしたドアを開けた。

薄暗い会場内で一つ目の作品が、入るとすぐにお出迎えをしてくれる。「畑山 高貴（31）」と題された全長3mの大きな銅像だった。全裸の男性のをモデルにしているようだ。アートだ。

次に現れたのが。「若田部光平（51）」と題された等身大の剥製だった。この作品も全裸の男性だった。アートだ。しかし誰かに似ている。後藤に聞いてみた。

「はあ岸。俺にはわからん。」

後藤にもわからんか。この小柄な感じは見た事あるはずなんだけど。念のためタイトの男女にも聞いてみよう。

「えーと、先ほどの方ではないですか」

なるほど。そうか、なんとなくドクター・コスモスに似てる。多分似てる。多分そうに違いはない。小柄な感じ、皺の感じが近い。

「神楽坂 郁（17）」等身大の銅像。全裸の女性。アートだ。

「佐喜子」等身大の剥製。女性。服が破れ肌が露出している。エロスだ。

「水」空のコップが一個。アートだ。

「空気」水がたっぷりと注がれたコップ一個。アートだ。

「本」土から生える植物。歴史だ。

次は最後の展示物らしい。「Love, Me too」と題されている。

丸く平たい石が壁に立て掛けられている。表面は人のような彫刻が施されている。穴が数カ所あいている。おおよそ目と鼻と口の部分にあたるのだろう。口の場所は赤黒く変色している。

後藤がおもむろに53mきっかしの物干竿を右手に持って振り回し始めた。僕は止めに入ろうとした。すでにタイトの男女は物干竿に当たり倒れている。

「よお岸。俺に任せとけよ。さあ岸。頑張るぞ。」

後藤は物干竿を「Love, Me too」の口めがけ投げ込む要領で思い切り押し込んだ。

照明がたかれ、横で待機していたであろうバンドらしきメンバーがサイケデリックな音楽を奏で始めた。

それはノイジーかつロックな曲調だった。僕は好きだと思った。

そして「Love, Me too」の口の中から大量の切断された手が吐き出された。

粘膜のような液体に覆われた、切断された片手の集合体。僕にはその状況が面白くて仕方が無かった。

鼓動が収まらない。それは普通な事。だが高鳴りがする。聞こえる。どこからか遠くで。知らない町で。行ってみたい、知らない町へ。どこか遠くへ行ってみたい。知らない町へ。遠い町。遠い海へと。そして漂い、蒸発し、凝固し、雲になり、雨を降らせ、河に戻り、とんがり帽子の取水塔を通り、水道を抜け、コップの中へ。

そしてその振動は、僕の口の中にあるのだ。君たちの口の中にもあるのだ。畑山や神楽坂や若田部やドクター・コスモスや佐喜子や今岡の口の中にもあるのだ。

コタローだけはドックフードの中にあるのだ。

ところで、なんで僕らはここに来ようとしていたのか。気持ちとしてはもう少し飼育小屋で寝ていたかったのに。わからない。そうだ、後藤に聞いてみよう。

「お前の順番が回って来たからだよ、よお岸。」

そうだった。たしかにそう言われた。でもなんであそこへ向かうんだ。

「俺らは現実を超えなければならぬんだ。超えようという意識はあってもなくてもいい。でも、本人として個人としてそれを超越できた時、俺の言ってる事がわかるはずだ。そうだろうお岸。」
後藤がおかしくなってしまった。

「結果、1からの無限という考えでもいいんだ。しかしながら無限からの1という考えもないが、しろにしてはいけないんだ。だよなあ岸。」

「僕は思った。何を言ってるのかわからないが、後藤は神様なのではないかと。」

「さあ岸。ラーメンを食べにいこう」

今日も晴れている。

快晴だ。

カーテン越しに見えるベランダ。

洗濯物が乾いた風でクルクルと廻っている。

光が差し込んで、部屋のあちこちを突き刺す。

ちっ、今日も晴れてやがる。

晴れば晴れる程、気分が滅入る。

どれくらいこうしていたんだろう。

危ないよ

早く渡って

またあの声。

どこかで聞いた声。

なんだろうこの焦燥感。

そういえば、手紙が届いていた。

若田部 光平

：誰だっけ。

それにしてもすごい部屋だ。こないだ掃除したのはいつだっけ。

どこから手を付けていいのかわからない。

埃ってどこからやって来るんだろう。

……はぁ

何と無しにとりあえず、その出所の解らない手紙を手にした。

封を開けてあたしは暫く押し黙った。圧倒されたのだ。

無限にさえ感じられる程、一面に広がる秋桜畑の写真。と、一枚の手紙。

「お元気ですか？約束の写真をお送りします。」

あの時の約束を3年越しに、今やっと果たせました。

ちょっとした災難に合い、思いがけず休暇ができたので、これも福と成すと言った所でしようか。

お父上にも宜しくお伝えください」

？……ああ。若田部光平、このヒトあの時のオッサン。

3年前、14歳のあたしが訳も解らず父に連れられて行った、何かの比較的小規模な講演で会ったヒトだ。

『…ルデラ』

『…まはげは…』

『インテリジェント・コスモスの…』

『…いでも急が…ても、世界は…に急がない…』

『そんなに急いだ方が、却って渡れないでしょう』

どんな内容の講演だった。

講演終了後、父はそのヒトと何だか親しげに話していて、傍らでつまらなさそうな顔をしていたあたしに、そのヒトは何か言ってきた。何を言われたか、何を答えたか、そのほとんどを覚えていないけど、「秋桜畑を見た事があるかい？」

あたしが無いとそっけなく答えると

「いつか写真を送るよ。君はきつと、その写真を気に入るよ。」

何言ってるんだ、このヒト。あたしは秋桜が好きだなんて一言も言っていない。

そんな事があった事すら忘れていた。

なのに、この写真を見た瞬間、何かが物凄い勢いで体中を駆け巡った気がした。

そうだ、あたし、歩いてる途中だったんだ。

危ないよ

また。やっぱり、どこかで聞いた事がある。

早く渡って

ああそうか、あたしの声だ。あれは、あたし自身だったんだ。どうしてあたしは、こんなにもひたすらに歩き続けてるんだろう。

そういえば、途中で何か音がした。

あれは：何かが落ちてきた音？

どうして立ち止まらなかったんだろう。

何だったんだろう。

大切なモノだったかもしれないのに。

大変な事が起きていたかもしれないのに。

どうして前しか見なかったんだろう。

あたしだ。あたししか見ていなかったんだ。

そうだ、約束。

あたしは約束をしていたのに、すっかり忘れて、随分と遠い所まで歩いてきてしまった。

あれは、ただの発言にしか思えなかったけど、約束だったんだ。

約束したんだ、気付かぬうちに。

あれは自分との約束。誰も知らない、自分だけの約束。

あの時、あの音がした方を誰かが見ていた。

ずっと、ずっと、見ていた。

ような気がする。

行ってみようか。いや、もう間に合わない。もうその音の元は消えているだろう。

いや、でも間に合うかもしれない。

兎に角行ってみよう。ここでこうやって迷っているうちに、行こう。

あの場所が実際に存在したかすら定かでは無いけれど。

音、も本当に聞こえたのか判らないけど。

それでも兎に角行ってみよう。

あたしは秋桜畑の写真だけポケットに突っ込んで、家を飛び出た。

失
踪

「今岡さん！ 大変!!」

「え!? 何?」

「若田部さんがいないの!!」

「>????」

「どこにもいないのよ!!」

「!!!!!!」

ヘッドフォンから流れてくるメロディを口ずさみ、佐喜子は澄み切った青空の下を歩く。歩く。歩く。

足取りは、口ずさむメロディに合わせてように軽やかだ。

ポケットの入れっぱなしの写真も、昨日見た展示会も、狩られて半べそかいていた中年も、目の前を歩く若田部という男も、全て現実感がまるでないけれど、佐喜子の表情はとても穏やかで、むしろ、楽しんでるように見える。

今、私は、生きてる。

それが全て。それが今の私の全て。

こうして過ぎる毎日の中に、ほんの少しエキスを加える。

それだけで、世界は広がる。

何故、焦る必要がある？

何故、時間に縛られる？

何故、生きたいように生きない？

何故、もっと周りを見ようとしらない？

今、私は、生きてる。

それが全てなんだ、と佐喜子の全身から「熱」がほとぼしっている。

若田部「着いたよ」

何に邪魔されることなく、歩き続けた佐喜子と若田部の前には、一面の秋桜畑が広がっていた。佐喜子の爪に塗られた桜色のような秋桜が、いじらしく真っ直ぐ青空に向かって。